

## 家庭科における視聴覚教材利用の効果について

—中学校保育領域の場合—

太田昌子\* 久我俊子\*\* 杵多由美子\*\*\*

---

Masako OOTA, Toshiko KUGA and Yumiko KIDA  
The Effectiveness of Audiovisual Teaching Materials  
in Home Economics Education  
—A Study in the Field of Nursing  
of Junior High School—

---

**Abstract:** The purpose of this study is to find a better audiovisual teaching method in home economics education.

The subjects were the girls students of a junior high school, who were divided into two groups: the experimental-group (instructed by audiovisual teaching materials) and a control-group (instructed by standard lecture method). We gave three experimental lessons, and the effect of each lesson was analyzed comparatively. The results were as follows:

- 1) Generally, impressive scenes in the films, or sound films, or the projection of the films two times worked effectively for memorizing and understanding a lesson. The results suggest both the necessity of systematic and premeditated preparations of the materials and appropriate applications of them.
- 2) Several cases in which the audiovisual teaching intensified the students' sensory cognitions were observed.
- 3) Most of the students reacted affirmatively to the classes in which audiovisual teaching materials were used.

### 緒言

よりよい家庭を建設し、よりよい家庭生活を實踐して行く人間の形成が家庭科教育の目標であるが、その根本となる人間形成の基盤は乳幼児期の保育にある。親としての責任の自覚、また子どもを一個の人間として尊重する精神がややもすれば薄れかけているという現在においては、家庭科における保育学習の重要性はとりわけ大きいといえる。

しかし保育学習の指導には現在さまざまな問題点がある。中でも近年の核家族化、また専産化傾向の進展に伴い、生徒が乳幼児に接する機会が少なくなっていることは、保育学習をいっそう困難なものにしている。

それを乗り越えて本来の保育学習の目標をめざし、より

学習効果を高めるためのさまざまな実践が試みられているが、ここで取上げた視聴覚教材利用の保育学習もその一つである。視聴覚教育のさまざまな利点はさておき、特に保育学習としては、例えば次のような学習効果が期待される。即ち①生徒が乳幼児に接する機会が少ないため保育学習に対する興味が低い場合、視聴覚教材利用の学習により興味を抱かせ意欲を高めることができるのではないか。②話し合いのみの授業では知識、理解が抽象的でまた知識の羅列に陥りやすいが、これを具体的な事象を通して心情的に訴えることにより、真の知識や理解に深めることができるのではないか。③現在の中学校保育学習は技術的な内容（例えば幼児服、幼児食、おもちゃ作りなど）が半ばを占めている。これらの学習もたいせつではあるがややもすると保育の根本である「乳幼児の成長、発達の理解」という総合的、系統的な理解を欠くきらいがある。これらを視聴覚教材を通して養わせる

\* 島根大学教育学部家政研究室

\*\* 島根大学教育学部附属中学校

\*\*\* 米子市啓成小学校

ことはかなり有効ではないだろうか。等である。

視聴覚教育の有効性や問題点等についてはこれまで先人たちのさまざまな実験報告によりかなり明らかにされて<sup>2)3)4)</sup>いるが、家庭科教育における実験報告は必ずしも多くはない。今回は保育学習を例にとって、視聴覚教材利用実験の授業を試み、家庭科におけるよりよい視聴覚教育確立のための一資料としたいと考えた次第である。

研究方法

(1) 研究対象及び研究期間

表1および表2のとおりである。

(2) 事前調査

知能テスト結果および1, 2学期の家庭科総合成績を

表1 研究対象

内容群	授業形態	学校	学年	組	人数
実験群	視聴覚中心の授業	島根大学附属中学校	3年	1, 2組	44(名)
統制群	教科書中心の授業	島根大学附属中学校	3年	3, 4組	44(名)

表2 研究期間(昭和50年)

内容群	事前調査	授業①および直後のテスト	授業②および直後のテスト	授業③および直後のテスト	約50日後のテストおよび調査
実験群	9月4日	9月11日	9月18日	9月25日	11月13日
統制群	9月6日	9月8日	9月18日	9月22日	11月10日

表4 保育学習に関する生徒の実態と意識 一予備調査結果一

質 問		群		群			
		実験群 N=42 回答率信 頼区間	統制群 N=44 回答率信 頼区間	実験群 回答率信 頼区間	統制群 回答率信 頼区間		
乳児の 機能 会に 接す	ア ほとんど毎日接している	6~29	5~25	保育 意識 学習 の 価 値	ア 非常に大切, ぜひ勉強の 必要あり	28~59	25~54
	イ 1週間に1~2度	15~42	6~27		イ まままあ大切, 少しは	28~59	23~52
	ウ 1か月に1~2度	8~31	19~47		ウ あまり大切でない, 勉強 の必要なし	0~13	0~8
	エ 1年に1~2度	18~47	25~54		エ わからない	5~26	14~40
	オ 全く接することがない	5~26	1~16				
乳親 幼児 感に 対す る	ア 好き	41~72	33~63	幼 児 O ・ H P の 生 活 を 見 る 映 ・ 教 説 話 科 書 を 合 わ り 聞 く そ う し た り	ア ぜひやりたい	11~37	31~61
	イ どちらかといえば好き	18~47	21~50		イ やりたい	41~72	33~63
	ウ どちらかといえば嫌い	1~16	0~12		ウ やりたくない	0~13	0~8
	エ 嫌い	0~9	0~8		エ わからない	9~34	2~19
	オ 何とも思わない	1~16	3~22				
保 育 学 習 味	ア 大変興味がある	6~29	9~33	ア ぜひやりたい	0~9	1~16	
	イ 少し	51~80	35~65	イ やりたい	24~54	27~56	
	ウ 全く興味がない	2~20	5~25	ウ やりたくない	1~16	5~25	
	エ わからない	5~26	11~35	エ わからない	41~72	29~59	

(注) 比率の信頼区間算出は藤田英二氏の計算式による。

表3 知能テスト及び1, 2学期の家庭科総合成績の結果

内容群	知能テスト			1, 2学期の総合成績		
	人数	平均	標準偏差	人数	平均	標準偏差
実験群	44名	123	6.05	44名	201.3	30.4
統制群	※42名	120	7.83	41名	194.9	22.6

(n=84, t=1.938, P>0.05) (n=83, t=1.097, P>0.05)

※ 統制群には一人知能のやや低い子が見られ, 正確な比較を行うため除外した。

注 1, 2学期の総合成績とはテスト, 提出物, 授業での態度などから総合的につけられたものである。

比較したが実験群, 統制群間に有意差は認められなかった。(表3参照) また保育学習に関する生徒の実態と意識の調査を行なったが両群間に有意差は認められなかった。(表4参照)

(3) 題材「幼児の世話」(全15時間)

今回の実験授業はこのうちの次の三項目である。

- 1) 乳幼児の発育(1時間)……これ以後は授業①と称す。(身長と体重・体のつりあい・睡眠)
- 2) 運動機能の発達・遊びの発達(1時間)……授業②と称す。
- 3) 生活習慣の発達(1時間)……授業③と称す。
- (4) 視聴覚教材の製作

1) ハミり映画(4本)  
市内T保育所において撮影し編集した。

表5 学 習 過 程

主題	学習内容	教授・学習過程	教具・教材		指導上の留意点
			実験群	統制群	
① 乳幼児の発育	導入	幼児についての印象や、気づいたことを発表する ↓ 学習目標の確認をさせる ↓ 自分の幼児期の発育について発表 ↓ 資料を見て幼児の身体的発育の特徴を話し合う ↓ 幼児の発育の特徴を確認させる ↓ 資料を見て、幼児の体のつりあいの特徴を話し合う ↓ まとめる ↓ 資料を見て幼児の睡眠について話し合う ↓ まとめる ↓ 評価	ハミリ映画 (幼児の生活)	教科書 資料集	<ul style="list-style-type: none"> <li>幼児に対する関心を高めるため、映画を見せたり、自分の幼児期を思い出させたりして幼児の特徴を発表させる。</li> <li>母子手帖を見て、自分の発達をふり返えらせることにより、発達ということを感じさせる。</li> <li>乳幼児期の発達の著しさを知らせる。</li> <li>成人と比較して幼児の体のつりあいを考えさせる。</li> <li>幼児に接するときに注意せねばならないことをまとめる。</li> <li>幼児の発達にとって睡眠が重要なものであることを知らせる。</li> <li>ペーパーテストによる。</li> </ul>
	幼児の発育 ・身長・体重  ・体のつりあい  睡眠	母子手帖 OHP	母子手帖 横造紙にかいた図		
	運動機能の発達  遊びの発達	幼児の運動機能の発達について話し合う ↓ まとめる ↓ 遊びの発達について話し合う ↓ 遊びによってどんなことを身につけるか発表する ↓ まとめる ↓ 評価	ハミリ映画 (運動機能の発達)	プリント	
生活習慣の発達 ・食事 ・排便 ・睡眠 ・清潔 ・着衣  まとめ	幼児の生活習慣が、どのように発達するか考える ↓ どんな点に注意してしつけをすればよいか発表する ↓ まとめる ↓ 乳幼児の生活や発達について話し合う ↓ まとめる ↓ 評価	ハミリ映画 (生活習慣の発達) OHP			

## (内容)

## A 幼児の生活 (映写時間約12分)

保育所での一日の生活を中心に、授業で学習する内容を導入的に織り込んだ。

## B 運動機能の発達 (映写時間約7分)

年令を追って、まだ寝ている頃から歩いたり走ったり、階段の上り下りができるようになるまでの乳幼児の運動機能の発達をとらえた。

## C 遊びの発達 (映写時間約10分)

ひとりではしか遊べない頃から次第に社会性が身につく、共同で砂場遊びなどができるようになるまでをとらえた。また、遊びから何を身につけていくかを考えさせるよう配慮した。

## D 生活習慣の発達 (映写時間約13分)

食事・排出・着衣・清潔・睡眠などの発達を、年令を追って配列し、また生活習慣の発達の重要性を考えさせるよう配慮した。

## 2) スライド

体のつりあいを一目で比較できるよう、1～5才までの幼児及び成人を立てて並ばせ、正面からと側面からと二枚撮影した。

## 3) 録音テープ

幼児たちが食事する際に歌う歌、あいさつを録音した。

## 4) OHP用TP (表6参照)

表6 指導方法における両群の相違点

群	実験群	統制群
内容		
導入	ハミリ映画「幼児の生活」を通して話しあう	先生や生徒の経験をもとに話しあう
身長と体重	OHP (0～20才、胎児～5才までの身長と体重の発達のグラフ)	模造紙に書いた図 (実験群と同じ内容のグラフ)
体のつりあい	OHP (乳児と大人を比較した体型の特徴の図) スライド (1～5才並べて比較したもの、乳児と大人の体型を正面と側面から比較したもの) OHP (脳の発達、他の動物と比較した表)	模造紙に書いた図 (乳児と大人を比較した体型の特徴) 表 (脳の発達、他の生物と比較したもの)
睡眠	OHP (一日のうちの睡眠時間の割合0～6才、全睡眠時間と夜の睡眠時間の割合の発達0～7才を示したグラフ)	模造紙に書いた図 (実験群と同じ内容のグラフ)
運動機能の発達	ハミリ映画(前掲)	
遊びの発達	ハミリ映画(前掲)	プリント(砂場遊びの観察について)
生活習慣の発達	ハミリ映画、録音テープ(前掲) OHP (排出、睡眠、清潔を絵で表わしたもの)	

表7 授業直後における学習内容の把握度

① 乳幼児の発育			② 運動機能、遊びの発達			③ 生活習慣の発達		
群	実験群 N=44	統制群 N=44	群	実験群 N=34	統制群 N=41	群	実験群 N=44	統制群 N=41
回答の内容			回答の内容			回答の内容		
幼児の生活の特徴	34	4	運動機能の発達	41	50	生活習慣の発達	254	198
身長と体重の発達	51	43	内訳 発達の例 具体的記述なし	(10)	(10)	内訳 食事の発達のみあげているもの 排出の発達のみあげているもの 清潔の発達のみあげているもの 着衣の発達のみあげているもの 睡眠の発達のみあげているもの 具体的記述なし	(49)	(43)
体のつりあい	69	76		(31)	(40)		(43)	(29)
内訳 体のつりあい 体型の特徴 脳の発達	(40)	(20)	遊びの発達	62	54	着衣の発達のみあげているもの 睡眠の発達のみあげているもの 具体的記述なし	(39)	(21)
	(23)	(20)		内訳 発達の例 遊びの意義 具体的記述なし	(16)		(3)	(47)
睡眠	(6)	(36)	内訳 発達の例 遊びの意義 具体的記述なし		(15)	(23)	しつけについて	(37)
	49	48		(31)	(28)	(39)		(29)
計	203	171	計	103	104	計	302	238
平均	4.61	3.89	平均	3.03	2.54	平均	6.86	5.81
	**			*			*	

注：\*は95%信頼水準で有意差のあるもの、\*\*は97%信頼で有意差のあるもの、\*\*\*は99%信頼水準で有意差のあるもの。以下各表においても同様である。

(5) 学習過程

授業①②③の学習過程は表5に示す通りである。尚表6は学習過程における両群の教具、教材の違いを示したものである。

(6) 評価方法

事前調査、授業直後のテスト及び感想文(3回)、約50日後の追跡テスト及び意識調査、また授業中の生徒の反応などを記録したものを比較検討し考察した。さらに実験授業後に扱われた幼児服の製作に当て予め課題となった「幼児服のデザイン」に見られる生徒の考え方などからも、知識の保持および理解度、応用力などを探ることとした。

結果及び考察

次の観点から両群の学習効果を比較・検討してみた。

1. 授業直後における学習内容の把握度について

授業①②③の直後に、「勉強した保育学習の内容を書きなさい。」という設問を行ない、学習内容の把握度を比較した。結果は表7の通りである。尚採点は、授業で何を習ったかという項目ごとに1点ずつ、またその習った項目ごとに例をあげていたらそれに対し1点ずつ加点し、その合計点を以て成績とした。

まず授業①における両群の差をみると、「幼児の生活の特徴」において、ハミリ映画を中心として学習した実

験群の方が、教師、生徒の経験を中心として学習した統制群より点数が高く、それだけ印象深かったといえる。しかし「脳の発達」をあげた者は実験群より統制群に多い。この学習方法は実験群ではOHPの図表によって、統制群では模造紙に描いた図表によってすすめられたのであるが、むしろ明るく鮮明な模造紙の図表の方が優れたようである。また、実験群ではハミリ映画を映写するのに時間がかかり、「脳の発達」の学習時間が少なかったのに対し、統制群の方では充分な時間をかけて行ったことも影響していると思われる。このように、映画を映写するために時間をとられ、それだけ話し合いの時間が少なくなるという問題点が考えられる。しかし平均点においては実験群が統制群より高く、有意差が認められた。

授業②においての両群の差は、まず「遊びの発達」をあげた者のうち具体例をあげた者の数が実験群に多いということであるが、これは映画にあらわれた遊んでいることもたちのさまざまな姿が印象に残ったためと思われる。平均点においても実験群が高く両群間に有意差が認められた。

授業③における両群の差は「生活習慣の発達」全般にわたり表われている。この授業では映画を特に2回映写してその効果をみたが、やはりそれだけ印象が強まったといえよう。平均点においても両群間に有意差が認めら

表8 授業直後における知識の保持及び理解度

① 乳幼児の発達			② 運動機能, 遊びの発達				③ 生活習慣の発達			
質問	実験群 N=44	統制群 N=44	質問	実験群 N=34	統制群 N=41	質問	実験群 N=44	統制群 N=41	実験群 N=44	統制群 N=41
	正答率信頼 区間	正答率信頼 区間		平均値	平均値		正答率信頼 区間	正答率信頼 区間		
一生のうち身長、体重の成長が最も著しい時期はいつか	24~53%	46~75%	乳児が歩けるようになる迄の発達順序	5.62	5.07	発達のある あらわれる 年令時期	はしが使えるようになる	59~86%	23~53%	
出生児の頭長は身長何分の一か	92~100%	92~100%	グループを作りルールにそって遊ぶ	52~81%	60~87%					パンツがひたとりでぬげ
乳幼児の体型の特徴	3.91	3.73	ブランコがこげる	25~59%	43~73%	ボタンをはめることができる	62~88%	45~75%		
次のグラフ(睡眠時間に関するものは何を表わしたものか)	84~99%	81~98%	やっとなでられるようになる	30~64%	43~73%	洗面や歯みがきができる	39~69%	38~69%		
乳幼児にとって睡眠がたいせつな理由	1.33	1.31	2, 3人で遊べるようになる	38~69%	43~73%	スプーンを持って食べる	31~61%	29~60%		
			おとなと同じように階段を上り下りする	4~28%	23~53%	手を洗った口をすすぐ	84~99%	57~85%		
			こどもは遊びの中で何を身につけていくか	4.71	4.18	よい生活習慣をつけるために注意すること	23~52%	19~48%		
				*			平均値	3.56	平均値	3.07
				**			**			

れた。

以上見られた如く、授業直後における学習内容の把握度は、映像によって印象が強められた実験群の方が確かにすぐれているといえよう。

## 2. 授業直後における知識の保持及び理解度について

次に授業直後における知識の保持及び理解度を比較してみたい。授業①②③の直後に行なった設問及びその回答結果は表8の通りである。

まず授業①の結果を比較してみると、両群間の成績にはほとんど差が認められなかった。ただ、「一生のうち身長、体重の成長が最も著しい時期はいつか。」の問に対しては、統制群の方がやや良い結果を示しているが、これは、やはり統制群の方が教科書を中心にして整理された知識として与えられたのに対し、実験群ではその点がやや不十分だったためと考えられる。また、「次のグラフは何を表わしたのか。」の問の結果は、実験群ではOHPを、統制群では模造紙に描いた同じグラフの効果をみたものであるが両群間に差は認められなかった。また「乳幼児にとって睡眠はなぜたいせつか。」の問に対しては、「たいせつと思う理由」も自由に答えさせたが、その内容についても両群に差は認められなかった。

授業②について、まず「乳児が歩けるようになる迄の発達順序」を見ると、実験群が統制群より良い結果を示した。この項目については、実験群では初めから計画的にわかりやすく撮影編集した映像を見せたが、一方統制群では、教科書そのものが発達ということを余り系統的には扱っていない。しかし統制群でも資料集を用いたり経験談なども織りまぜて話し合い、理解を深めた筈ではあるが、やはり実験群には及ばなかった。目的を明確にして計画的に、また印象深い映像を撮影編集することの重要性がここにかかわれる。それと逆のことが、「やっと走れるようになる時期」「おとなと同じように階段を上り下りするようになる時期」などの結果にみられる。すなわちこれらの場面は画面にはあっても表現のしかたが不十分であったり、或いは画面そのものが暗かったりしたものが多い。このようなことから、じゅう分に時間をかけて話し合い印象づけられた統制群の方が良い結果を生じたものと思われる。しかしまた、「こどもは遊びの中で何を身につけていくか。」というような、やや深い内容を問うた質問に対しては、実験群の方が統制群よりやや良い結果を示し、有意差が認められた。この授業は、実験群では砂場遊びの映画を、統制群では砂場遊びの様子を文章で描写したプリントをもとにして、それぞれ子どもが遊びの中で何を身につけるであろうかと話し合ったものである。やはり視覚に訴えた映画の方が

印象深かったのであろう。しかしそれが現実的、直接的に印象づけられはするものの、それを言語化して発展的に思考し表現するという段になると、むしろ統制群の方が優るようである。このことは表9にみられる。すなわちその回答内容をつぶさに検討してみると実験群より統制群の方がかなり語いの種類が多く、変化に富んでいるといえる。

表9 「こどもは遊びの中で何を身につけていくか。」の回答内容

両群に共通に多く見られたもの	実験群に多く見られたもの	統制群に多く見られたもの	計
社会性	・集団生活のルール(3)。 ・協力(5)。 ・共同性。 ・集団の技能(2)。 ・交友すること 12	・連帯感(2)。 ・協調性(2)。 ・協力(6)。 ・共同性(2)。 ・指導力。 ・自主性。 ・競争心 24	36
自然への興味・関心	・自然をかすかに感じとる	・新しいものの発見 ・自然に親しむ(8)。 ・発見力。 ・観察力(6)。 28	29
運動機能の発達	・遊びの技能(2)。 ・運動神経。 ・器用さ 4	・体力。 ・技能。 ・筋肉の発達。 ・物を作る技術(2) 5	9
心の発達を促すいろいろな力(創造力・想像力・思考力)	・知識がつく。 ・工夫(2)。 ・思いやり(2)。 ・感情の発達。 ・感覚的なことを身につける。 ・生活性 8	・知能の発達。 ・いたわり。 ・思いやり。 ・工夫(2)。 ・努力。 ・精神力。 ・がんばる力。 ・粘り強さ。 ・強い意志(3)。 ・生活能力。 ・忍耐力(2)。 ・集中力。 ・熱中力 17	25
計	25	74	99

注：( )内の数字は二つ以上の回答数があった場合の回答数である。項目の右下に示す数字は合計である。

以上の如くみても、全般的には実験群には映像の良否などによって知識の保持や理解度にむらがあり、一方統制群は一貫して安定した結果を生ずる傾向がみられた。

授業③では、まず「はしが使えるようになる時期は何ごろか。」の問に対して実験群の方が統制群より良い結果を示した。これは「スプーンを持って食べようとする時期」についても同様であるが、ハミり映画ではスプーンやはしを使って食事する幼児の姿がかなり鮮明に印象深くとらえられていたことと無縁ではないように思われる。さらに食事場面ではあいさつの声や食事の歌を録音して流したので、一そう印象が深まり保持率が高くなったものと思われる。また「パンツがひとりでぬげる時

期」も実験群が統制群より優れているが、これも映画の表現がよかったためのものである。すなわちこの場面はパンツを脱ごうとするのになかなか脱げないで一生けん命やっている幼児の姿をひとりのみならず数人とらえたものであったが、生徒たちはその姿をほほえましく見ていたようであり、印象も深かったのであろう。このように、映画の効果があらわれているとみられるのは「よい生活習慣をつけるために注意すること」という質問の回答結果についてもいえる。すなわち前述のような食事場面では、例えば一才前後の子ども達に対して食前に手をふいてあいさつしてから食べるということ、保育さんが自分から手本を示してやって見せると、子ども達も真似をする場面、また着衣に関してはパンツがなかなか脱げないで困った子が先生のそばへ行って助けを求めても先生は忙しそうに知らぬ振りをするので、また自分で一生けん命やっている場面などがとらえられており、周囲のおとながどんな態度をとるべきかを考える好材料となったようである。授業③は全般的にみると授業①②に比べ実験群が優れているかまたは同等のものが多い傾向がみられる。これは先に述べたように映画そのものが比較的効果的に作られていたことや、一部録音を入れてより効果を高めたこと、また映写を二回行ったことなどが影響しているものと思われる。

3. 約50日後における知識の保持及び理解度について  
 評価方法としては授業直後のみならず、真の保持度や理解度をみる一方法として、約50日後に予告なしのテストを行なった。問題は授業①②③の直後のテストと同じものを幾つか選び構成した。表10はその結果を直後のテスト結果と並べて示したものである。まず全般的にいえることは、やはり50日もたてば正答率は低くなるということである。(中には例外もあるが)そしてその落込み方は、平均すると実験群、統制群共約7割程度であり二者間に差は認められなかった。すなわち実験群の方が保持率がよいということにはなかった。また個々の問題でみると、例えば「乳幼児の体型の特徴」や「発達のグラフ」のように必ずしも動く映像を要しないものは、OHPよりも横造紙に書いた資料を用いた統制群の方が高い保持率を示している。また実験群で授業直後には比較的良好な結果を示した、「はしが使えるようになる時期」「パンツがひとりで脱げるようになる時期」「スプーンを使って食べようとする時期」などに対する正答率も約50日後にかなり低下してしまい、統制群との差を縮めている。このように約50日後における知識や理解の保持において実験群が必ずしも期待する程の結果を示さなかった原因は、やはり映画利用前後の指導不足にあると思われる。このような前後処理の重要性については、既にこれ

表10 知識の保持及び理解度の授業直後と約50日後の比較

質問	群				質問	群				
	実験群		統制群			実験群		統制群		
テスト時期	授業直後	約50日後 N=44	授業直後	約50日後 N=43	テスト時期	授業直後	約50日後	授業直後	約50日後	
① 乳幼児の発育	乳幼児の体型の特徴	3.91	2.69	3.73	3.26	はしが使えるようになる	59~86%	41~71%	23~53%	30~61%
	次のグラフは何を表わしたのか	84~99%	60~86%	81~98%	81~98%	パンツがひとりで脱げる	62~88%	37~67%	45~75%	26~56%
② 運動機能の発達、遊びの発達	乳児が歩けるようになるまでの発達順序	5.62	5.41	5.07	4.98	ボタンをはめることができる	39~69%	31~61%	38~69%	39~70%
	グループを作りルールにそって遊ぶ	52~81%	60~87%	60~87%	59~87%	スプーンを使って食べようとする	84~99%	37~67%	57~85%	28~59%
	やっとな走れるようになる	30~64%	21~53%	43~73%	30~61%	手を洗ったり口をすすぐことができる	23~52%	5~25%	19~48%	12~38%
	2, 3人で遊ぶようになる	38~69%	45~75%	43~73%	51~81%	よい生活習慣を身につけるために注意すること	3.56	1.83	3.07	1.35
	おとなと同じように階段を上り下りする	4~28%	6~31%	23~53%	17~46%					
	こどもは遊びの中で何を身につけていくか	4.71	3.04	4.18	2.68					

迄の研究により指摘されているが、今回の実験授業においてもこのことが確かめられた。すなわち映画を映写するために時間をとられたことも重なって、教師の話を静かに聞いたりじっくりと話し合ったりする時間が実験群にはやや欠けたようである。そのためたとえ一時的には強い印象を受けたとしても、それを言語化し系統的な知識として定着させることが少なくなり、長期の記憶

に堪え得なかったものと思われる。しかしまた、このことだけで視聴覚教育の効果疑問視するのも早計であろう。なぜならばこれらのペーパーテストで見られるのは主として言語的知識であって、測定不能な、もっと深く生徒たちの心情にくい入った、感性的認識については、恐らく視聴覚教材を用いた授業は優れていると思われるからである。このことは次の「幼児服のデザインについて考慮すべきこと」に対する回答結果からもうかがえる。この採点は幼児服のデザイン上配慮すべきこととして自由に述べさせた答えのうち、理にかなっているものに対して一点ずつ加点したものである。その結果をまとめたのが表11である。ここに見られるように、合計点は実験群がやや多いがさほどの差ではない。しかしその回答内容を見ると、実験群の方が「運動機能」や「着脱の便利さ」「汚れてもよい材質」「洗たくしやすい材質」のように、機能性に着目した答えが多い。また年令との関係を述べたものも実験群の方が多かった。このような結果は実験群が映画で子どもたちが活発に動いたり遊んだりしている姿を見たり、或いは乳児から6才ごろまでの成長過程を視覚的に把握できたためと思われる。そして無意識のうちに乳幼児の生活をより動的にとらえる心構

表11 「幼児服のデザインについて考慮すべきこと」に対する回答内容

考 慮 事 項	実験群 N=44 回答数	統制群 N=44 回答数
機能的なデザインについて述べたもの	120	113
材質の機能性について述べたもの	61	51
見た目のかわいらしさについて述べたもの	40	50
年令とデザインの関係について述べたもの	60	46
そ の 他	6	4
計	287	264
平 均 値	6.52	6.00

表12 保育学習についての生徒の意識 ——約50日後の調査結果——

質 問		群		群		
		実験群 N=44	統制群 N=43	実験群	統制群	
保育学習への興味	ア 大変興味がある	回答率信頼区間 6~27 (6~29)	回答率信頼区間 9~33 (9~33)	回答率信頼区間 23~52%	回答率信頼区間 32~62%	
	イ 少し興味がある	70~93 (51~80)	61~87 (35~65)	21~50	38~68	
	ウ まったく興味がない	0~12 (2~20)	0~9 (5~25)	84~99	78~97	
	エ わからない	0~8 (5~26)	1~16 (11~35)			
保育学習への価値意識	ア 非常に大切、ぜひ勉強の必要がある	23~52 (28~59)	32~62 (25~54)			
	イ まあまあ大切、少しは勉強する必要がある	35~65 (28~59)	20~48 (23~52)			
	ウ あまり大切ではない、勉強する必要はない	0~12 (0~13)	0~9 (0~8)			
	エ わからない	5~25 (5~26)	11~36 (14~40)			
保育学習の効果	ア 役に立った	48~77	61~87			
	イ 役に立たなかった	0~12	1~16			
	ウ わからない	21~50	9~33			
	授 業 ①	幼 児 の 生 活 身 長 と 体 重 の 発 達 脳 の 発 達 発 育 の 早 さ 体 型 の 特 徴 睡 眠 時 間 の 発 達	回 答 数 1 2 2 0 0 2	回 答 数 0 4 4 1 3 4		
	授 業 ②	運 動 機 能 の 発 達 遊 び の 発 達 こ と ば の 発 達	4 25 1	6 9 0		
授 業 ③	生 活 習 慣 の 発 達	16	14			
な し, 無 答		5	5			
回 答 数 計		58	50			

注：( ) 内の数値は予備調査の結果である。





認識の変化について」自由に述べさせた回答結果からもうかがえる。すなわち同じく表12にみられる通り実験群の方が統制群より回答率が低いのであるが、これも映像から受けた印象をまとめて文章表現することの難しさから来たものと思われる。そしてここにも学習の中での映画の取扱い方の重要性が感じられる。しかしその具体的な回答内容を見ると、統制群では「発達についてよく分かった。」「子どもを育てるのはむずかしい。」「幼児の理解が深まった。」というような総括的な表現が多かったのに対して、実験群では「幼児がひとりで服を着るようになるのが早くびっくりした。」「乳幼児がかわかった。」「自分でさせ過保護にならぬことがたいせつ」というような映像から感じ取ったことをそのまま書いているものが目立った。このようにたとえ文章では書き表わせないにしても無意識の中に感じとったものは恐らく生徒の心の中に消えずに残って行くものと思われる。

次に授業①②③の中で印象に残った内容について両群を比較してみたい。表に示すように、主として静的な内容を扱った授業①では、OHPを使った実験群より模造紙を使いまた話し合いを中心とした統制群の方がより印象に残ったようである。しかし授業②ではかわいらしい子どもたちの遊びのようすが実験群の生徒たちにはかなり印象的だったようである。同じ保育学習でもどのような内容にはどのような教具、教材を用いるのがより効果的であるかを考える必要がある。

#### 5. ハミリ映画学習についての生徒の意識

次に視聴覚教材利用の学習の問題点をさらに追求するため、ハミリ映画学習を行なった実験群生徒の意識を問うてみた。まず視聴覚教材利用学習を生徒たちはどう受止めたかを総括的に問うてみた結果が表13である。これで見ると、大多数の者(44人中39人)は「大変よかった。」「まあまあよかった。」と満足しているようである。一方「どちらでもない」は4人、「あまりよくなかった」は1人であった。よかった理由としては「よくわかった」「興味がわき楽しい」ということをあげている。たとえことばではじょうずに表現できなくても何かが得られたということであろう。

次に「映画の中で印象に残った内容」を問うてみると、表14にみられるようにやはり「食事の発達」「着衣の発達」「遊びの発達」などに関するさまざまな場面であったようである。尚、「生活習慣の発達」は前にも述べたように二回映写していることや授業後の日数が最も浅いことも関係していると思われる。

次にさらに細かく「映画を使った学習のよかった点、悪かった点」を指摘させた。結果は表15のとおりで

表15 映画利用学習のよかった点・よくなかった点

	内 容	回答数	計	
よ か っ た 点	よくわかってよかった	25	32	
	内 訳	幼児の様子が理論だけよりわかりやすい		(21)
		年令別、行動別にわけてあるので		(2)
		顔の表情がよくわかってよい		(1)
		教科書以外のことがよくわかった		(1)
	あとまで印象に残るので	3		
ハミリ映画を使ったこと自体よかった	2			
ふだん見られないのでよかった	1			
とても楽しかった	1			
よ く な か っ た 点	音声を入れるとよかった	19	36	
	ハミリ映画の使い方に問題があった	14		
	内 訳	ハミリの構成(授業との関連で)		(5)
		いろんなことに少しずつしかふれられなかった		(1)
		もっとうろろ見なかった		(1)
		習ってから見た方がよかった		(1)
	内 訳	一回見て板書後もう一度見るとよい		(1)
		具体的記述なし		(1)
		ハミリの使い方		(7)
		スクリーンの位置を考えてほしい		(1)
暗く時々見にくい所があった		(2)		
速度を落とすとよかった		(1)		
内 訳	説明の時間が短かった	(2)		
	具体的記述なし	(1)		
	ハミリに頼りすぎていた	(1)		
	同じ保育所であったこと	(1)		
様子はよくわかったが内容が頭に入らずぬけてしまうような気がする	1			
実際に接して見たかった	2			
要 望	家での様子が知りたい	1	2	
	実際に子どもに接したい	1		
	無 答	1	1	
	計	71	71	

ある。中学三年生ともなると、かなり鋭く観察し批判しており、今後の視聴覚教育のあり方にとって参考になることが多かった。生徒たちがよかったとする点の第一は、「理論だけよりわかりやすかった」ということである。しかしここではむしろよくなかった点の指摘に素直に耳を傾けてみよう。まず「音声を入れるとよかった。」が19人で半数近く最も多かった。ごく一部ではあるが音声を入れた部分に対する生徒の反響は確かに大きく知識の定着もよかった。保育学習では子どもの話すことば、笑い声、歌声、周囲のおとなの受け答えのことばなどを入れることの効果は特に大きいと思われる。全般的な撮

影技術の向上と共に今後の課題である。また、「映画の使い方に問題があった。」という指摘にもうなずかざるを得ない。「いろんなことに少しずつしか触れられなかった。」「習ってから見た方がよかった。」というような感想は、授業の中に映画をどう位置づけるか、また視聴のための時間不足をどう解決するかというような問題につながっている。また「スクリーンの位置を考えてほしい。」「暗くて見にくいところがあった。」「説明の時間が短かった。」などの指摘は、撮影技術に加えてさらに映写の技術、画面の大きさ、部屋の換気なども合せて、生徒全員がより快適に見られるよう配慮することの必要性を示唆している。またひとりではあるが「様子はよくわかったが内容が頭に入らずぬけてしまうような気がする。」という感想は、子どもらしい表現ながら視聴覚教育の長所短所をよくとらえており興味深い。

## 要約

附属中学校三年女子を対象に、保育学習における視聴覚教材中心の授業（実験群）の効果を検討し、よりよい指導方法を追求することを目的として、それを使わない教科書中心の授業（統制群）との比較を試みた。その結果は次の通りである。

- 1) 授業直後における学習内容の把握度については、明らかに授業①②③共両群間に有意差が認められた。すなわち実験群の方が視聴覚教材（特にハミリ映画）によって学習内容がより強く印象づけられたと考えられる。
- 2) 授業直後における知識の保持および理解度については、学習内容により差が認められた。一般に印象的な画面、音声を入れた画面、二回映写した画面は実験群が高く、静的な学習内容については統制群が高い保持および理解度を示した。
- 3) 約50日後の知識の保持および理解度については、直後の傾向と共通性を持っているが、しかし両群の差は縮小しており有意差はほとんど認められなかった。
- 4) しかし、感性的認識は実験群においてより強められたとみられる例証が、テストにおけるいくつかの記述式回答や幼児服デザインの考慮事項において認められた。
- 5) 保育学習に対する約50日後の生徒の意識は、予備調査との比較および両群間の比較においていずれも全般的に差は認められなかった。また知識の保持率や理解度の良い学習内容は生徒が印象が強かったとする内容とほぼ一致していた。
- 6) 視聴覚教材利用学習についての生徒の意識はかなり

肯定的であるが、またいくつかの問題点があることが指摘された。

以上の結果は緒論でもあげたような、保育学習における視聴覚教材利用学習への期待に全般的にこたえるものではなかった。しかしその製作を始め授業への組入れ方、映写法等すべてにわたっての教育的、技術的向上が計られるならば、その学習効果は大なるものがあると考えられる。今後はさらにこれらの要因と学習効果との関係についても検討してみたい。

最後に、この研究にあたって、映画等の製作にご協力いただいた「たまち保育所」の方々、ならびに被験者の附属中学校三年女子の皆さんに厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 山口寛子：新しい保育学習の課題と方法，家庭科教育，46巻10号，35～39，1972
- 2) 波多野完治，依田新・重松鷹泰監修：学習心理ハンドブック，金子書房，603～631，1968
- 3) 波多野完治編：視聴覚コミュニケーションと現代の教育，明治図書出版，1970
- 4) 文部省社会教育局視聴覚教育課編：視聴覚教育指導事例集1，第一法規，1975
- 5) 藤田英二：比率の信頼区間について，教育センターだより，S.50.5，島根県立教育センター，1975
- 6) 佐藤正：乳幼児の教育①からだの発達と導き方，福村出版，65～67，1967
- 7) 前出の2)，43～45，3)，627～629，4)，78